

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	板橋区成増1-35-26
園名	成増すみれこども園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

素材との出会い、五感を刺激する遊び

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

日頃から親しんでいる廃材や感触遊びを通じ、子どもたちの「探究心の種」を育むことを目的としました。「きれい」「なぜ?」と心が動く瞬間を大切に、五感を通じた感性・思考・主体性を総合的に育む学びを目指しています。結果ではなく、素材との出会いや試行錯誤のプロセスそのものを重視して設定しました。

2. 活動スケジュール

導入期(春・夏): 多様な素材(廃材・粘土・色水)に触れ、感触や特性を楽しむ。
展開期(秋): 好きな素材を組み合わせ、「こうしたい」というひらめきを形にする。
まとめ(冬): 共同製作や作品の共有を通じ、自分や友だちの表現を認め合う。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

《準備した素材・道具》

寒天: あらかじめ固めておき、子どもたちが手で握ったり潰したりできる状態にする。

トレー・カップ: 寒天を小分けにしたり、型抜きや移し替えを楽しんだりできるよう、数種類用意する。

スプーン: 手で直接触れることに抵抗感がある子も、道具を介して感触を確かめられるよう念の為準備。

《環境の設定と配慮》

自由な探索を促すルール設定:

「食べない」という安全上の最低限の約束事のみを伝え、それ以外の遊び方(崩す、混ぜる、並べるなど)には制限を設けないことで、子どもが自分の興味に沿って自由に感触を楽しめる環境を整える。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

五感を刺激する遊び：形が変化する素材で「不思議」や「心地よさ」を体験。オノマトペを用いながら体感した内容を日本ならではの言葉で表現できるような働き掛け。

プロセスの尊重：上手・下手ではなく、「どんな気持ち」「どんな感覚」など、表現の過程に寄り添う環境づくり。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

<活動の導入と心の動き>

初めて目にする寒天に対し、当初は戸惑いや緊張した表情を見せていたが、保育者が寒天の色を「電車みたいだね」と見立てて声をかけると、鉄道好きの子を中心に表情が和らぎ、安心感へとつながった。

<感触への反応と主体的な探索>

一人の子が真っ先に指を入れ、寒天が切れる面白さに気づいた姿が、周囲への良い刺激となった。躊躇なく握り潰して感触を楽しむ子もいれば、当初は不安を感じ保育者と一緒に行くことで徐々に安心し、最後まで遊び込めるようになった子の姿も見られた。一方で、体調や環境の変化から触れようとしない子には、保育者の膝の上という安心できる場を提供し、無理強いせず見守る配慮を行った。

<イメージの広がりや深化>

活動が進むにつれ、指先や手のひらで「つるん、ぷるぷる、ひんやり」とした感触を存分に味わう姿が見られた。カップや袋への詰め込み作業から、「ジュース」や「マグロ」などに見立てる遊びへと発展し、個々のイメージを膨らませていた。

<活動の締めくくりと次への意欲>

活動への愛着から「持ち帰りたい」という要望があり、ミニ袋に入れて配布した（家庭へは誤食防止の注意喚起を実施）。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

子どもたちは素材に対してより能動的になり、「まずやってみる」という主体性が育ちました。自分のひらめきが形になる喜びを知ることによって自信が付き、友だちの表現を面白がる共感性も深まりました。

大人があらかじめ正解や完成図を用意せず、素材（寒天）との出会いを設定するだけで、子どもたちは自ら「混ぜる」「刻む」といった実験を1時間以上も継続しました。保育者が介入を控え、じっくり見守ることで、子ども本来の集中力と探究心を引き出せることを再認識しました。

今後も、子どもたちの「なぜ？」に寄り添うアート体験を継続していきます。